

ーユーモアで探る新たな造形ー

sausage mania
駱駝が鍵の穴を通る
engine

芸術研究科 造形表現専攻
芸術表現領域 博士前期課程
2024年3月修了

水本了

主査 渡抜亮 副査 Robert David Platt 国本泰英

研究背景

私のアートワークは、もれなく衝動、その限り。最中は“描く”という行為のみがその衝動をなぞる。成ったかたち等に、立派な目的や厳かな意図はあまりない。が、それらは自身の内的なものにルーツやアイデンティティを置いた自分由来のものがほとんどで、それぞれに私なりの答えはある。が、それも他人に提起できる形を留めないものばかり。

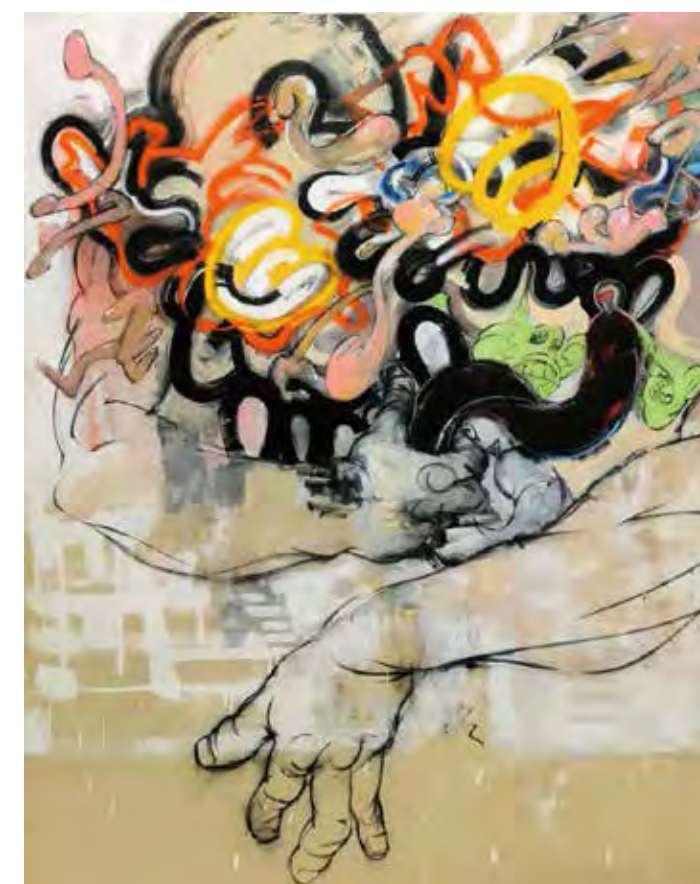
ユーモア。私が創作で往々にして試しているのはこれだと思う。

研究目的

ユーモアを描くというのは、人間に対する愛情表現である。そもそもが不完全な人間をそのまま肯定するような態度であるユーモアというものを、描くことによりさらなるユーモアさを創り出す。人間への深い愛情という土台があってこそそのムーヴである。

ユーモアをコンセプトに、人間のかたちを人間に密接している生き物や創造物への置き換え、見栄やわがままを含んだデフォルメで飾っていく。絵画というツールはこれらを一見させられる。

研究概要



成果・まとめ

自分の創作を作品にするために奮闘した。個性は構成するメディアから探った。自己分析を深め、背景を持ち寄った。モヤモヤを問題にしたがった。

できるだけ描くの前に多くの準備を身に纏ったが、私の場合、それらは重すぎました。

先行させた描くの適所にそれらを放ればよかったんです。

気づくのに時間はかかった。でも、その経験らが整えた。ここからの私はマッハ。



指導教員コメント

水本作品の大学院での制作過程において、この2年間の成長は大変大きく、躍動感あふれる修了制作になったといえる。以前研究していた繊細な線描制作が、ダイナミックな筆さばきと身体的な緩急の要素が大きく介入した結果、画面の向こうから迫ってくるような気迫を手に入れたように感じる。一貫してこだわり続けている布地などの材料研究も同時に実を結び、カオス的でありつつ心地よいリズムが画面に生まれている。

渡抜亮